

## 「支那学」の位置

### 一

「近代の漢学」について考えるとき、近代以降に登場した「支那学」とそれがどのような関係にあるのか、明らかにしないわけにはいかない。もちろん、それはたんに名称の違いにすぎず、実態としては同じなのだと言いなすこともできないわけではない。極論ではあるが、それまで「漢学」と呼ばれていたものを、近代にふさわしく「支那学」と読み替えたのだとする立場も有り得ないわけではない。しかし、たんに名称の変更にとどまらない意味があるのも確かであり、そのとき、なぜ「支那学」という呼称が必要

であったか、考える意味はある。

最近公刊された倉石武四郎の講義ノート『本邦における支那学の発達』（二松学舎大学二世紀COEプログラム）には、同氏の「日本漢文学の諸問題」（『国語と国文学』四〇二号、至文堂、一九五七）という論考が再録付載されているが、その中に「われわれの中国文学科がかつて支那文学科であり、その支那文学科が漢学科であったという歴史を考えたとき、その名称の変遷は単に便宜的なものでなしに、たえず相剋するものであり」と述べられているごとく、支那学は漢学を継承するものであると同時に、それと対立するものとして考えられていたのである。

ごく大ざっぱに言えば、前近代の漢学は普通の学として、

齋藤 希史

諸学の基礎に置かれたのに対し、近代の支那学は、あくまで中国という地域の文明ないし文化について考究するものだということになる。この違いは、中華文明秩序から近代国民国家秩序へと日本がポジジョンを変えたことに伴つての変化であると説明することが可能だし、理解もしやすい。また、支那学がヨーロッパの Sinology を参照して成立していることも、こうした説明には扱いやすい。つまり、中華文明秩序の中から中国を見るのではなく、その外側の西洋文明から見た視線において中国を支那として捉え直したことの例と見なすのである。

中華文明秩序を普遍の秩序と捉え、そこに参入するため  
の学として、近世以前の漢学はあつた。近代に至つて、それは普遍ではなく、東アジアローカルの文化として位置づけ直され、それに応じて、支那学という学問が要請された。日本にとつての中国が、もはや唯一の文明の源泉ではなく、世界に数多ある文化の一つであると思なされたことが、そこにも現れている。こうした説明には一定の妥当性がある。和漢という前近代のくくりから、支那と日本という枠組みが析出されていくことこそが、近代日本のナショナルリズムの核心であつたと理解するならば、漢学から支那学への転換は、きわめて自然なもののようにも思える。近代日本のナショナルリズムは、西洋に対する日本としてであるよ

り先に、中国に対する日本としての位置を固めることによつて成立する。中国というものの輪郭をはつきりさせることによつて、そうではない、日本が確立される。支那学はそのための学である。

しかし、漢学と支那学の違いを、こうした説明のみで済ませてしまうのは、やや単純すぎるようにも思える。

## 二二

ここで、近代の大学（とくに東京と京都）において漢学がどのような制度の下にあつたか一瞥しておきたい。

明治十年に東京大学が設立されたとき、文学部には史学・哲学・政治学・和漢文学の四学科が設置された。明治十五年には、文学部に古典講習科が新設され、明治十九年、東京大学が帝国大学となると、文科大学（もとの文学部）には哲学科・和文学科・漢文学科・博言学科が置かれた。明治二十六年からは、講座制が行われ、漢学・支那語学に第一・二・三講座が設けられた。そして明治三十八年には、支那哲学・支那史学・支那文学講座となり、さらに大正七年に、東洋史学講座が分かれて、支那哲学支那文学講座となった。名称から言えば、漢学から支那学への推移は明らかであらう。

したがって、明治三十九年に京都帝国大学に文科大学が設置されたとき、始めから漢学の名称がなく、支那語学支那文学講座はその最初から、そして支那哲学史が明治四十二年に設けられたのも、当然の成り行きとして首肯されよう。

一つ注目しておきたいのは、学科の名称としては、漢学から支那学への推移ではなく、漢文学から支那〇〇学への推移であったことだ。つまり、漢学から支那学への名称の転換は、漢学それ自体の分化を伴っていたということである。

前近代との継承関係で言えば、支那史学（東洋史）はひとまず措き、支那哲学と支那文学の分岐に、より着目したい。哲学が philosophy、文学が literature の訳語であることから、こうした分岐はヨーロッパの学問によってもたらされたものだと見なされるのが一般であろう。明治から近年まで、大学の文学部は哲・史・文の三学科を主軸としていた。すなわち哲学・歴史・文学である。こうした分け方は、たしかに西欧に学んだものであり、もともと漢学にはこのような分類は無かったと言うことはできる。漢学は普遍であると同時に総合であって、例えば初学入門の『文章軌範』のようなものを見ても、政論や史論と共に「赤壁賦」や「帰去来辞」などが収められているし、『四書』と

『唐詩選』とはどちらも学ばれた。

しかし、そこに分岐がなかったわけではない。「蓋し徂徠没して後、物門の学、分れて二と為る。経義は春台を推し、詩文は南郭を推す」（江村北海『日本詩史』巻四）と言われるように、「経義」と「詩文」という対比自体はすでに存在していた。そして、春台からすれば、「聖人ノ道ハ、天下国家ヲ治ルヨリ外ニハ別ニ所用無シ、……是ヲ捨テ学バズシテ、徒ニ詩文著述ヲ事トシテ一生ヲ過ス者ハ、真ノ学者ニ非ズ、琴棋書画等ノ曲藝ノ輩ニ異ナルコト無シ」（『経済録』巻一）であって、あくまで「経済」つまり治世の学としての「経義」の実践が中心となるべきであったし、たてまえとしては、広く共有された考えであった。つまり、「経義」を主とし「詩文」を従とし、兼ねて修めるというのが、漢学のあり方であった。そこに哲学と文学という枠組みが被せられた。

当然ながら、ずれはある。「経義」は治世を意識せざるを得ないが、哲学は政治学ではない。支那哲学の内実をそのまま「経義」とするのは、妥当を欠くだろうし、支那文学も、漢詩文を巧みに綴ることが学の目的ではない。京都帝国大学が「支那哲学」でなく「支那哲学史」としたのは、「経義」の学が儒者としての学であるのを、より客観的な視点による、あるいは外部の視点による学として組み換え

ようにしたとも言える。

いずれにせよ、「経義」と「詩文」の対比は、例えば、兼濟と独善、儒家と道家、士人と文人、公と私、等々の対比と、少しずつずれつつも、重ね合わせる事が可能な対比である。中国古典を中核に構成される世界に広く見られる対比であると言ってもよい。徂徠の学問は、経義も詩文も兼修し、そこに特色もあったわけだが、これは前近代の漢学全体の特徴であった。ある種のバランス感覚が、そこには働いていた。昌平黉の学問吟味においても、経義と詩文はそれぞれ一つの課目として立てられていたが、もちろんどちらにも必修であった。そしてこの分岐は、近代における支那哲学と支那文学の分岐の導入を容易にした。西欧的な哲学と文学の分岐が持ちこまれたときに、漢学における経義と詩文の分岐にそれが重ね合わされたのである。

西洋において哲学と文学は並立的なものであるが、漢学によって、微妙な偏差が生じた。もともと漢語としての「文学」は広く学問一般を指していたのであり、その残像はけて小さくはなかった。詩文が文学と呼ばれることによって、経義すなわち哲学と拮抗すべき価値が、暗黙の内々に求められたと考えても、無理はないだろう。あるいは、支那文学が一科として立てられたことによって、その内実

を定める必要が生じたと捉えてもよい。正統を任じる儒者からすれば余技に過ぎない詩文が文学として自立したのである。

注意すべきは、その自立が、詩文を中国固有のものとして捉える視線を得て行われたことである。学問としての文学は、普通の学である。しかし、詩文すなわち文藝を主軸におく文学は、それぞれの国民文化の学である。言い換えれば、「国」文学や「支那」文学という冠を被せることが要求される「文学」である。つまり、哲学と拮抗する文学というベクトルと、国民文化の学としてのベクトルとが合成されているところに、学としての近代の文学は成立している。文学を国民精神の発露と見なす視線は、日本における国文学史の編纂を促し、また、支那文学史の編纂を促した。こうした流れにおいて、漢学から分かれた支那文学は、聖賢の学ではなく文化の学として自らを定めていくことになる。中国固有の文化を考究するとなれば、それは経義に対する余技としての詩文という位置から脱することが可能になる。

また、literatureとしての文学は、詩文のみならず、小説や戯曲なども包括することができる。支那文化の考究という観点からしても、口語的かつ土着的要素の強い小説や戯曲を研究することは重要であった。従来の漢学であれば、

小説や戯曲は、詩文や琴棋書画以上に消閑の具として貶視したのであり、およそ学の内に含まれるとは考えもしなかつたものであろう。しかし、逆の立場からすれば、小説や戯曲こそ、聖賢からもっとも距離をおいた文藝であり、そこにこそ支那文化の精髓が現れているということにもなる。いわば、小説や戯曲を梃子にして、漢学から支那学を切り離すのである。ここに、大きな分岐がある。

### 三

こうした脈絡において見ると、狩野直喜から青木正児に至る流れは、旧来の漢学を大きく組み換えるものとしてあつたことが分かる。また、そこから照射することで、近代日本における漢学と支那学がどのような関係にあつたのか、従来考えられているのとは異なった輪郭が見えてくる。さらに言えば、現在の中国文学研究の枠組みを用意したものととして、青木の支那学を捉えることもできる。

青木は、明治二十年に山口下関に生まれ、昭和三十九年に歿した。狩野直喜（一八六七—一九四七）や内藤湖南（一八六六—一九三四）ら、支那学のいわば第一世代を師とあおぐ世代である。第五高等学校から、新設まもない京都帝国大学文学部支那文学科に進んだのが明治四十一年、狩野直

喜・内藤湖南・鈴木虎雄に師事した。大正九年には、小島祐馬や本田成之とともに『支那学』を創刊した。

支那学第一世代は、維新前後の生まれであり、基本的には旧来の漢学で育つた世代である。それに対し、青木は第二世代（鈴木は一八七八年生まれだから、ちょうどその間である）、支那学はすでに大学の学科となつていた。とはいえ、それは大学でのことで、一般的には漢学として扱われていたこと、青木が支那文学科に進学したことを回顧して、「たまた会ま京都文学部新に文学の科を置く。乃ち数人と相携て至り、専ら支那文学を攻めんと欲す、漢学は素と余が深く嗜む所に非ず、選んで之を取る所以は人の斯学を顧るもの少きを慨せしのみ」（『支那文藝論叢』自序、ルビは齋藤）と云うことであつた。ここでは、支那文学と漢学との違いは意識されていらない。加えて興味深いのは、青木自身が漢学にはそれほど馴染んでいなかったこと、一般からも軽視されていたということであろう。

青木は卒業論文に元曲を選んだが、これは、「読む所の書多くは国文稗史野乗の類、好んで小説戯文を作りて撰せず」（前掲）と云う自身の嗜好に由来すると同時に、狩野直喜の薰陶によるものであることも確かである。狩野は京都帝大で清朝考証学を講じると同時に、元曲などの俗文学も講じていた。清朝考証学はその実証的な手続きゆえに、

近代の学問と接続しやすいものであったし、元曲も、西欧の文学に対比すべきものとして、ヨーロッパの Sinology においてつとに注目されていた。確かに、こうした幅の広さは、哲学と文学の分岐が固定化した現代では考えにくいことだが、狩野にとっては、旧来の漢学がもっていた総合性の上に、支那のすべてを対象とする学としての Sinology がかぶさっていたのであるから、俗文学をも学の対象とする必然はあったわけである。

前近代にあっても、「水滸伝」や「三国志演義」などの小説は広く親しまれていた。漢詩文に親しむきっかけがあった。「通俗三国志」などの通俗物にあったこともしばしばであった。小説の言語である白話（俗語）を訓読で読むのは困難が伴ったことは事実だが、幕末から明治にかけて、小説を読むための辞典が大量に出版されていることを見れば、その困難にも関らず、訓読によって習得した漢文法を基礎にして白話を読む需要が大きかったことが知られる。

狩野は、明治三十二年に清国に留学しており、中国語にも堪能であった。中国の芝居もじかに目にしており、前近代の文人よりもはるかに容易に俗文学に親しむことができた。そもそも、明治四年の日清修好条規以降、両国の往来は盛んとなり、とくに江戸にあつて文人趣味を事とした人々にとって、清国行きは憧憬ですらあった。もちろん、

聖賢の国というイメージとのギャップや日清戦争によって引き起された蔑視も無視することはできないが、肯定的側面も重要であろう。

とりわけ、文人趣味が支那趣味に変容し、藝術への興味となり、それが支那学の基盤の一つとなっていることは、注意すべきである。旧来の漢学の解体は、何も西欧の学問の流入のみによるのではない。従来は趣味的領域とされていた事柄が学となり、学知全体の布置が変化したことも大きい。狩野はこの変化の推進者であった。

こうした狩野の革新を受け継ぎ、より専門の学として進めたのが青木正児であった。幼少期に「仙骨あり」と評されたごとく、青木の支那学は儒家的であるよりも道家的であること、「楚辞」や李白の訳業を見ても知られることである。士人的であるよりも文人的であること、自ら画を能くした趣味人であり、春台が曲藝と言ひ捨てた「琴棋書画」を著書のタイトルにするがごとくである。大正九年に出版された最初の著書は『金冬心之藝術』（彙文堂）である。また、その名物の学は、漢学の正統からすれば、「玩物喪志」と見なされかねないものでもある。

しかしそれこそが、吉川幸次郎や倉石武四郎などの戦後の中国学を生んだことを見れば、青木正児の支那学におけるそうした部分を趣味の学としてしまうわけにはいくまい。

あるいは、支那趣味なるものが近代日本においてどのようなものとして登場し、どのような位置にあったのかを見定めるためにも、学と趣味の境界にあるかに見える青木の支那学こそが、今後、考究の対象となるべきであろう。むろん、青木の第一論文集である『支那文藝論叢』（弘文堂、一九二七）を繙くだけでも、論は、藝術、詩、詞曲、小説、画、さらには、文学革命、日本における中国俗語文学などに互り、その対象はあまりに広い。詳細な検討にはなお時日を要しようし、あるいは亡羊の嘆をかこつことになるかもしれない。しかし、注意深く見れば、そこには自ずと一つの方向が浮かび上がってくるように思う。

吉川幸次郎は、『青木正児全集』第十卷（春秋社、一九七五）の劈頭に「完結の辞」を記し、次のように述べている。

「……」後人はここに、明治大正昭和の日本の学術史における一つの事実を見るであろう。中国文学研究が、独立した一科の学となつたのは、著者がもつともの画期である。事柄には、著者の師である狩野直喜、鈴木虎雄、また師でなかつた塩谷温らの諸氏があずかつている。しかし旧漢学からの脱皮というそのことにつき、もつとも決定的な態度は著者においてはじめて見る。「私をして儒家の仮説から自由にあらしめて貰ひたい。私は今様々な儒家の伶俐らしく説く詩教迷信の埒外に

いんで大局から詩教の発展を俯瞰して見たい。そして我儘な独断をさへ敢てして見たい。「……」」（大正十七年、「詩教発展の径路より見て采詩の官を疑ふ」全集第二卷二七頁（……）は齋藤による省略）

儒家の学からの解放のための場として支那学が機能したことは疑いない。青木はそれに自覚的であつた。儒家的な価値への対抗原理としては、もちろん西洋の学問も利用可能であつたし、狩野直喜がそうであつたように、青木もそれは十分に活用した。しかし同時に、儒家的価値への対抗原理は、すでに旧来の漢学のうちに胚胎していたのであり、青木の本領はそこに最大限發揮された。かつ、それが文人趣味や支那趣味の域にとどまるものではなかつたことは、考証の精密さや洞察の鋭さ、何よりも、文化史的視点に立つた俯瞰を失わない態度からも、それは窺える。往々にしてエキゾティシズムに耽溺しがちであつた大正昭和期の支那趣味とは、対照的ですからある。それは、例えば『支那文藝論叢』に収載された「覚醒せんとする支那文学」「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」に見られるような、中国文学の未来への関心とも通じていよう。総合的な把握が求められる所以である。

\*

幕末から明治にかけて、漢学が担った役割は大きい。素養としての漢学は、ヨーロッパの学問を吸収するための翻訳装置として機能したのとはより、西洋への対抗価値として東洋を宣揚する時の根拠ともなった。思想や学知としての明確な輪郭を持たぬ局面においてこそ、それは有効に機能したと言つてよい。

明治中葉以降、西欧の視線を導入することで成立した支那学が、「支那」を対象化することで「日本」を確立しようとするナシヨナリズムに支えられ、また、日本主導による東アジア再編の欲望と結びついていたことは、すでに耳に馴染んだ指摘であろう。しかし、支那学は Sinology のたんなる輸入ではなく、漢学を前提とし、それを再編成しつつ成立したものである。それが近世以来の素養としての漢学とどのように連続し、また、そこからどのように離脱するものであつたかを考えることは、近代における学知の転換を考えるうえで、あるいは素養の転換を考える上で、重要だ。

従来しばしば論じられてきた内藤湖南の支那学でなく、青木正児の支那学に着目することで、この転換の意義が明らかになるのではないか。本稿はそうした目論みのもとに、青木の支那学を一つの結節点とし、そこに至る流れを描く

ことを目的とした。雑駁な見取り図に過ぎないけれども、ひとまず提示しておきたい。

(東京大学准教授)